Ombra di Venezia

堀辰雄

青空文庫

きのふからギイ・ド・プウルタレスの「伊太利に在りし日のニイチェ」といふ本を讀み出してゐる。忠實な傳記ではないかも知れないけれど、なかなか面白い。いま讀んでゐるところは、ニイチェが三十六七の時、獨逸を去つてはじめて伊太利に赴き、先づ最初ヴェネチアに滯在してゐた頃（一八八〇年三月―六月）の有樣を敍した一章であるが、ここに描かれてゐるニイチェの姿には、これまであまりにも屡　ニイチェといふ名の下に描かれてゐるディオニソス的な人間とはかなり相違した、ずつと我々には親しみ深く思はれるものがある。私はさういふヴェネチアにおけるニイチェの姿をプウルタレスから少し抄して見よう。――

ヴェネチアでは、ニイチェは、あるバロック式の古い館の、大理石を敷きつめた大きな室の中に住んでゐた。そこから聖マルコ寺院までは、埃のない、日蔭の多い、もの靜かな通りを、三十分位で散歩して來られた。ニイチェの大好きであつたヴェネチアの日蔭、――それは彼のその時書いてゐた本「曙光（モルゲンレエテ）」が長いこと「ヴェネチアの日蔭」（Ombra di Venezia）といふ題をつけられてゐたほどであつた。彼の生活は細心に規則的であつた。毎朝七時か八時頃から仕事にとりかかる。それから散歩と粗末な食事。二時過ぎになると、友人のペエタア・ガストがやつて來る。このペエタア・ガストといふ男は、バアゼル大學時代からのニイチェの教へ子で、いまは作曲家を志してゐる。ニイチェをヴェネチアに招んだのはこのガストであるが、いまはもうこの男だけがニイチェの忠實な友人であり、原稿の淨書やら、口授筆記やら、病氣

の世話やら、何から何まで面倒を見てやつてゐる。そのガストが暫らく一緒にゐてから歸ると、又改めて七時半まで仕事をする。すると再びガストがやつて來て、夕食を共にする。ときには半熟の卵と水だけですましてしまふこともある。それから大概、一緒にガストの家に行つて、代る代るピアノを彈き合ふ。ニイチェは自分で作曲したものを彈いたり、即興曲をやつたりする。ガストはショパンに私淑してゐて、彼の曲ばかり彈いてゐる。このヴェネチア滯在中くらゐ、ニイチェは音樂に親しんだことはなく、そして彼はもはやショパンのみしか愛さなくなつてゐた。

ショパンとニイチェ。——この二人の病人、この二人の純潔な情熱家、この二人のいたるところを漂泊する孤獨者の間には、魂の血緣といふやうなものがありさうである。この二人の中で和音をして顫動してゐるものは、先づ、生きんとする劇的な悦びであらう。それから更らに附け加へたいものは、懷疑の裡に仕事をすることの愉しさ、——恐らくそれは、氣高い方法で苦しむこと、そしてそれを意識してゐること、それからまた、ありふれた光榮を約束させるやうな愚鈍な誠實さよりも寧ろちよつとした短い叫びの方を選ぶことの樂しみ、とでも云ふべきであらうか？　とプウルタレスは穿鑿してゐる。

ワグネルが「トリスタン」を作曲したのは矢張りこのヴェネチアであり、後年自らその作品は、「あの素ばらしいヴェネチアを音樂化したもの」であると言つてゐるが、ニイチェもまた、その「曙光」の中で彼のヴェネチアを音樂化してゐると言へよう。その内的なヴェネチアは、

彼が散歩をしながらだの、カッフェに休んでゐる間だのに取つたさまざまなノオトの間から、まるで新しい歌のやうに聽えてくるのである。

後年、ニイチェは「この人を見よ」のなかに當時を回想しながら、かう書いてゐる。「一體私は音樂にいかなるものを欲してゐるかに就いて、最も選ばれたる讀者諸君のために一言したい。音樂は、十月の午後のやうに快活にして深いものであること。それは獨得で、奔放で、そして柔軟であり、可憐なる少女のごとく狡くてしかも優雅であること。……由來、獨逸人のごときものに音樂の何たるかが解せられようとは私は思ひも及ばぬ。獨逸音樂家と稱せられてゐるものは、ことにそのうちの最も偉大なるものは、外國人である。スラヴ人か、墺太利人か、伊太利人か、和蘭人か、——或は猶太人である。さもなくば、ハインリヒ・シュッツやバッハやヘンデルのごとき優秀なる種族、今日では既に亡びたる種族の獨逸人である。私自身は、シヨパンのためになら他のあらゆる音樂を犧牲にしてもいいと思ふほど、自分が充分に波蘭土人であることを感じてゐる。私は三つの理由からワグネルの「ジイグフリイド牧歌」を例外としたい。又、そのオオケストレエションの崇高な抑揚によつて他のすべての音樂を凌駕してゐるリストの或物、それから又、アルプスのあちら側で——今ではこちら側だが——生れたところのすべてのものも例外としたい。……私はロッシニなしにはすまされない、又それと同じ位、音樂における私の南方、わがヴェネチアの大作曲家ペエタア・ガストなしにもすまされない。そして實は私がアルプスのこちら側といふのは、ただヴェネチアだけを指してゐるのである。

もし私が音樂をそれで代用させるやうな一語を求めるとしたら、私はヴェネチアといふ一語をしか見出さないであらう。私には涙と音樂との區別をつけることは出來ないのである。……」

青空文庫情報

底本：「堀辰雄作品集第五巻」筑摩書房
　1982（昭和57）年9月30日初版第1刷発行
底本の親本：「堀辰雄作品集　第四・晩夏」角川書店
　1951（昭和26）年6月15日
初出：「文藝通信」
　1936（昭和11）年6月号
※初出時の表題は「Ombra di Venezia――手帳より――」、「堀辰雄作品集　第四・晩夏」角川書店収録時「Ombra di Venezia」と副題がはずされる。
入力：tatsuki
校正：染川隆俊
2010年3月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

Ombra di Venezia

堀辰雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/